

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	一般演題口演
タイトル	非がん患者の在宅緩和ケアと医師による予後予測
日時	平成 25 年 3 月 31 日 9 : 40 ~ 9 : 50
会場	第 8 会議室
座長	坂本医院 坂本 仁先生
演者	岡山大学大学院保健学研究科 齋藤 信也先生
企画趣旨	<p>【目的】在宅緩和ケアにおける予後予測は、患者・家族の意向に沿った良い死を迎えるために重要であるが、がん患者と異なり、非がん患者のそれはかなり困難であると考えられる。そこで、今回医師を対象に、予後予測に用いる指標および予測とのずれならびに予測にもとづく支援体制づくりに関して調査を行ったので、結果を報告する。</p> <p>【方法】2012 年 4 月～8 月に 11 政令指定都市の在宅療養支援診療所 805 に質問紙を送付し、回答を得た。</p> <p>【結果】有効回答数は、52（有効回答率 6%）であった。回答者の背景は医師としての経験年数が平均 29.2 年、診療所医師としての年数が 14.1 年であった。診療科は内科が 66%と大半を占めた。</p> <p>【考察】在宅療養をしている非がん患者の予後予測を医師が行う際には、身体症状よりも、看護師と共通の生活機能（移動能力、日常活動、セルフケア、経口摂取）が良い指標になっていることが判明した。ターミナル期の判断と実際の差では、予測とほぼ同じが 44%予測より長かったのが 21%、短かったのが 20%であった。非がん患者の在宅における予後予測の難易度は「とても困難」19%、「やや困難」32%、「わりあい容易」32%、「容易」2%であった。予後予測の際に訪問看護師の意見を参考にするかという質問には、「大変参考にした」27%、「かなり参考にした」32%、「少しは参考にした」12%、「あまり参考にしなかった」10%と、大半の医師が参考にしていた。訪問看護師からのターミナル時期の進言については「いつも従う」7%、「ほぼ従う」36%、「ケースによる」39%、「参考程度にする」5%である一方、「従わない」は 0%であった。ターミナル期に過ごす場所、医療処置の選択、蘇生措置の意向確認等環境整備に関しては医師が確認したのが 70-77%と医師による確認が大半であった。</p> <p>【結論】医師が行う、非がんの在宅患者の予後予測には、訪問看護師のもたらす情報が非常に重要なことが明らかとなった。</p>